

# 看護教育における思考訓練の重要性

## —デューイの反省的思考論を手がかりに—

明星大学人文学部教育学専攻博士課程

佐々木 秀美

### 緒 言

学習をすると言うことは単に知識を詰め込むことではない。教育の場面で必要なことは、生活の過程で引き起こされるあらゆる場面に対応できる人の育成である。その為には物事を深く考える、すなわち思考の訓練が必要となる。思考の訓練は看護師を育成するといった職業教育においてはさらに要求されることである。なぜならば、看護の目的は人々の健康生活を支援することであり、人々の健康の保持・増進・回復に向けて援助をしていくことが責務である。したがって、問題は常に日常の業務の中に存在するということである。看護を実践する上で必要なことは、今、現在、何が問題であるのかを的確につかみ、速やかにその問題を解決していく能力を看護師が持つことである。故に、そうした実践能力を持った看護師をいかに育てるかということが今、看護教育上の問題である。

松木光子は「良質の看護実践をして看護の成果を得るには、個々の看護師の思考と判断がその良質の看護を決定する。そのためには個々の看護婦の思考力と判断力の育成が鍵である。」<sup>1</sup>と述べ、critical thinkingの重要性を説いている。critical thinkingとは一般的に批判的思考と訳されている。criticの語源はギリシャ語のKurino(分ける)であり、与えられた対象をその要素について分割し、その要素と全体との連関を明らかにし、認識の真理性に照らして、全体的な連関について評価することである。thinkingとは哲学する、あるいはある事象に対して自分で考えることである。従って、看護においてcriticalにthinkingするというとき、例えば、それは患者の現実に引き起こされている健康問題に関して科学的に解明しようとする思考のことであると筆者は考える。

健康問題に関して科学的に解明するということが、それは看護過程(nursing process)の重要な要素である。

critical thinkingを看護過程に適用したアルファロ(Rosalinda Alfaro-Lefevre)はcritical thinkingを定義づけて「目標に向かって注意深く熟考していくこと、これを用いて複雑な状況をアセスメントし、実際に起こっている問題や起こる危険性の高い問題を明らかにし、実施計画について判断する。」<sup>2</sup>としている。その上で彼女は看護過程を質の高いケアや効率、患者の満足度を高めるためにきわめて効果のある原理・原則に基づいた組織的・系統的な方法であると述べている。

さてこうした看護過程における思考の過程は、アメリカのコロンビア大学教育学部のプロジェクト法(project method)による問題解決の方法と過程が大きく影響したとされる。<sup>3</sup>アメリカにおけるノーマル・スクール(師範学校)の発展の歴史の中で、ロンビア大学も教育学部や看護学部へと再編成された。その経緯の中でナッティング(Mary Adelaide Nutting)は、1907年、コロンビア大学の教授に任命され、世界最初の看護学教授となっ

た。当時、デューイ (John Dewey) もコロンビア大学教育学教授であり、1910年に『How we think (思考の方法)』の初版を著した。さらに彼は同書の内容を修正し、1933年に第二版を出版している。コロンビア大学教育学部と看護学部との関係を考えてとき、デューイの思考の過程が看護過程に導入される土壌があったということであろう。デューイは『How we think』の中で「学習 (learning) とは思考することの学習である。」<sup>4</sup>と述べている。彼が述べているように教育の本質は基本的に粗雑な思考方法から可能な限り、緻密な思考方法に向けさせるよう働きかける事である。そこで筆者は1933年に著した『How we think』におけるデューイの思考の訓練について検証し、看護教育における適用について検討を加える。

## 1 プロジェクト法における問題解決法

先述したように現在、看護教育及び看護の実践の場で適用されている看護過程は、プロジェクト法による問題解決の方法と過程が大きく影響したとされる。プロジェクト法とは、デューイの問題解決の過程において思考が働き、知識・技術が習得されるとする教育哲学と、ソーンダイク (Edward Lee Thorndike) の教育心理学を、キルパトリック (William Heard Kilpatrick) が教授法として定式化したものである。『教育学辞典』<sup>5</sup>及び『プロジェクトメソッド』の注釈に記述されている解説を総合すれば、プロジェクトという言葉の教育における最初の使用は、1900年、コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジが最初であり、児童の自己表現としての“手仕事 hand work”を“プロジェクト”と呼んでいたとされる。キルパトリックは著作『プロジェクトメソッド』の中で「私自身“プロジェクト”という用語をここに適用するに際し、意図していることは目的 (purpose) という語彙を特に強調した。目的ある行為、ということにほかならないのである。」<sup>6</sup>と述べている。彼によれば目的ある行為を以って教育の基本原則とすることは、教育の過程を価値あるものにすることであり、“プロジェクト”という概念が教育の目標を達成することにつながるのである。そして目的ある行為が成り立つために必要なのが学習の法則をどのように活用するかであった。ここで重要な学習の法則がソーンダイクの準備の法則 (the law of readiness), 効果の法則 (the law of effect), 練習の法則 (the law of exercise) である。彼は動物の試行錯誤学習から、学習は経験によって刺激と反応の間の結合が徐々に強くなる過程であると考えた。<sup>7</sup>

生活過程における刺激とは生活事象、いわゆる問題のことであり、試行錯誤をしながら問題解決能力をたかめていくのである。したがって、プロジェクトメソッドにおける学習過程は、学習の進め方を明確に打ち出すことにある。キルパトリックはプロジェクトメソッドにおける学習の過程は「目的を立てること (purposing), 計画すること (planning), 遂行すること (executing), 判断すること (judging) の段階をたどって成り立つのである。」<sup>8</sup>と述べている。続けて彼は、これらの段階によって学習者は活動により生じた結果を判断する能力をもち、その結果、注意力と成功率から、未来に対する予見なり、教訓なりを導き出すことができるようになると述べている。未来に対する予見なり、教訓なりを導き出すことができるということは、学習者の内面に意味の増大が図れるということであ

り、この意味の増大が学習への興味をさらに喚起し、創造的な思考ができるということにつながる。キルパトリックは目的をもった思考の過程はデューイの思考の分析による思考の過程であると述べている。<sup>9</sup>つまり、デューイの著作『How we think』で述べている問題解決法のことである。看護を科学的・系統的にするための研究は1950年頃から始められたが、コロンビア大学教育学部ではチームナーシング (team nursing) や看護計画 (nursing care plan) に関する研究がなされ、プロジェクト法が導入されたのである。

## 2 問題解決法としての看護過程

人間の基本的な生活行動を支える看護活動も基本的には技術を中心とした実践活動である。看護の実践活動は、通常、看護過程として説明されている。看護学生が最初に学ぶ杉野佳江編のテキストには看護過程について以下のように説明している。

「看護過程とは、対象となる人々の健康問題を系統立てて、科学的に解決するために、看護の立場から判断し、計画を立てて、実施、評価する一連のシステム化した活動をいう。」<sup>10</sup> 又、アルファロは「看護過程とは看護婦が健康問題（実際に起こっている問題、起こる危険性のある問題）を診断・治療するために用いる方法である。」<sup>11</sup>と説明している。つまり、看護過程は、患者に実際に引き起こされている問題を解決するための一つの原理・原則に基づいたシステムの活動の為の方法である。

- その方法は1 アセスメント（観察、推理・推論・分析・統合が含まれる）
- 2 看護診断（あるいは患者の健康問題の明確化）
  - 3 看護計画（目標・具対策が含まれる）
  - 4 実践
  - 5 評価

の五つの段階によって示されている。観察には客観的データと主観的データがあり、その集められたデータを分析し、判断を加えることによって問題に焦点を当てることが可能になる。問題が明確になったら、成果を考え、具体的援助行動に入る。その上で、実際に行った援助を評価する。成果が十分でなかった時、最初のアセスメント段階から看護が妥当であったかどうかを検証し、再計画・実践・評価していくといった一連の過程が看護過程と呼ばれている。

他方、反省的思考における問題解決としてデューイは「反省的思考は関係発見の過程である。」<sup>12</sup>と述べ、反省的思考の五つの側面として以下の5項目を挙げている。

- 1 暗示 (suggestion)
- 2 知性的整理 (intellectualization)
- 3 仮説 (hypothesis)
- 4 推論作用 (reasoning) (分析analysis)
- 5 検証 (testing)

デューイによれば、暗示は情報収集の手がかりになり、集めた情報は整理され、一つの

仮説が得られたら、分析され、統合されて結論に至るのである。暗示についてデューイは「我々の、過去の経験の作用として、我々に生起するのである。」<sup>13</sup>と述べている。例えば、雲行きがあやしいと思った場合、そのあやしいと思うのは暗示である。雲行きがあやしかった場合、何が暗示されるかといったら、その後に雨が降るかもしれないからである。したがって、雲行きがあやしい場合、その後に雨が降ると我々が考えたとしたら、それは過去の経験から考えるのであり、それは推論、あるいは予測、あるいは仮説になる。デューイは「あらゆる反省的活動の場合において、ひとは一定の事態 (Situation) に直面するが、現前の事実を根拠として現存しないものに関する観念に到達する過程が“推理”である。」<sup>14</sup>と述べ、「直接的観察が確証を提供する。」<sup>15</sup>と述べている。この場合でも、風向きや風によってもたらす空気の湿度や雲の量といった直に観察したことが確証をもたらし、気象予報官の情報や雨の降る確率などが根拠となって、我々は外出には傘を持参しよう判断し、行動する。デューイは「観察が事実を構成する。この事実が暗示や観念や仮説の成立を規制すると共に、問題解決の方法を開示するものとしての暗示観念仮説が含む価値を検証するものである。」<sup>16</sup>と述べている。このように我々は日常生活の中で、多くの情報と直に観察したことをとおして、今後のことを予測し、行動している。

看護活動においてもそれは同じであり、デューイの反省的思考と同じように看護過程を展開する。発熱という情報だけでは身体のどこかに炎症が起きているのか、あるいは非炎症性なのか判断できない。しかし、逆に発熱という情報は身体のどこかに炎症があるという暗示にもなり得る。暗示は次の問診への手がかりになる。発熱はもしかしたら肺炎？と考えたら、その確証の為の情報を得ていく。得られた情報を整理し、分析することによって病気の診断が為され、治療が開始される。看護も同様に発熱という現象から、個人の健康上の問題が抽出する。発熱のほかにも、脈が増加している事を観察したら、発熱によって個人のエネルギーの消費を増加させていると考え、体力の消耗を最小にする働きかけをするであろう。

デューイは「判断作用を通じて混沌たる条件が整理され、見たところ相互に何ら脈絡のない諸事実が結合せられる。その整理活動が分析である。この結合活動が総合 (synthesis) である。」<sup>17</sup>と述べている。このように看護実践における看護過程はデューイの反省的思考の方法に類似しているのであり、一つの思考過程である。彼は「思考作用とは何らかの新しいものを見出すために、もしくは既知のものを別に光のもとに眺めるために行われる穿盤であり、研究であり、裏を返してみることであり、模索し没頭することである。一言で言えば、思考とは問題提起である。」<sup>18</sup>と述べている。アルファロは看護師が日常の看護場面で看護過程を使うことによって、問題解決や意志決定能力が向上し、人的・物的資源や機会を最大限に活用できるようになり、看護の最終目標を達成する満足感が得られると述べている。

### 3 看護場面における思考作用

わが国の看護の教育界では1955年頃より看護過程という方式が紹介され、看護の場に普及していった。その探求は観察と推理を必要としている。観察したことを推理・推測し、

統合する力、それこそが看護過程において必要欠くべからざる要素であり、看護婦に必要な資質であると考え。デューイは「思考が真に反省的であるように思考の諸過程を保障する秩序的な配慮、教育上はこれが論理的であるということであり、観察や暗示や検証の自然的諸過程に関する“統括 regulation”を意味する。いいかえればこれが“技術art”としての思考作用を意味するのである。」<sup>19</sup>と述べている。更に言いかえればartとしての技術は非言語的感知と反省的思考作用のミックスである。一般に人間行動の特徴は目的意識的であり、技術的である。即ち、事物の客観的法則性を意識し、これを実践に適用することによって自己の目的を実現する。

次の事例は日常的に行われている看護場面である。この簡単な事例から、看護場面における非言語的感知と反省的思考について考えてみよう。

朝、閉めきった患者の部屋に訪問した看護師。

何となく室内の空気がムット生暖かく感じた。

この場面で“感じ”たのは、看護師が感じた皮膚感覚であり、非言語的である。看護師がそのまま放置すればこの看護師は何も考えていない。諸事実を構成する条件に注意を払うことで、行動可能な幾つかの暗示が起こる。その時、私達は、いずれが良いか判断をしなければならない。判断を余儀なくされたとき、私達には新たな観察と想起が起き、暗示された解決方策の価値を検証するために、すでになされた観察を再吟味するよう導かれる。

デューイは「観察は仮説によって導かれる時に価値がある。」<sup>20</sup>と述べている。観察は五感の直接的使用によってなされ、あるいは他の人によってなされた観察を想起することによってなされる。観察によって得られた諸条件が“その事件の事実 facts of the case”を構成する。それらの諸条件こそが“そこ there”にあるものであり、考慮されなければならない問題である。デューイは「暗示せられた類推は“思索”の内部において相違なる暗示中の諸要素が相互に脈絡があるか否かを知るために検証される。暗示された類推は、その類推中、いずれか、一つが採択された後、思索において予想される結果が“事実 fact”において生起するか否かを知るため“行動 action”によって検証される。」<sup>21</sup>と述べている。

患者はこのむっとした空気の中で過ごしているのである。知識を持っているか経験のある看護師は一晚室内を閉めきっていれば、室内は患者のあるいは人の呼吸によって二酸化炭素が多くなって室内がよどんでしまうことを知っている。セルフケア能力のある人は自分で室内の換気をすることが出来る。寝たきりの人はどうか。患者が自然の営みを自分で行うことの出来る人であるかそうでないかを、判断する能力を持っている看護師は思考する。そして観察する。これが反省的思考である。そして、自分が感じた生暖かい感覚は質的思考であり、看護師は患者の生活過程を共有しながら、思考を展開していくのである。それが暗示 (suggestion) になり、一つの仮説を生む。そして、窓をあけたほうが良いかどうかの判断をするためにお部屋の温度感覚について患者に聞いて見る。

“おはようございます。〇〇さん、夕べはよくお休みになれましたか？少し、お部屋が暑苦しくありませんか？”その上で彼女は患者の反応を確かめ、“朝のさわやかな空気をいれてみましょうか？”という声かけができ、窓をあけるという行動につながる事が出来る。看護過程は一つのシステムの科学的な思考過程であるが、他方、日本的な表現

によれば、気配り目配りといった感性的な側面も持ち、看護を受ける者の満足につながっていきと考えられる。

看護におけるもう一場面を例示してみよう。

検温の時、脈拍を取っていた看護師は患者の手のおいが気になった。

この場面では看護師の嗅覚から感じたのである。通常的生活で私達は毎日風呂に入り、清潔を保つことが出来る。ところが、寝たきりになるか、あるいは病気の為に入浴が禁止された場合、どうなるか。“臭う”ということの意味するもの、それは清潔が保てていないのではないかということを示唆する。そのことを確かめるため看護師の観察は進む。皮膚の汚染の度合いはどうか。何時から入浴をしていないかを患者に聞いてみることも必要である。看護師のケア実施記録ではどうなっているのか。患者の清潔のための計画がどうなっているのか等を確認した後、それは妥当でないことを知るであろう。つまり、臭うということに問題を感じたところから観察が始まり、その結果、適切なケアの実施につなげることが出来るのである。それゆえ看護師が活動しているときは常に思考しているのである。このように人の生活過程を支援する看護師も、常に患者の健康上の問題を抽出し、未来に向かって問題が解決するよう働きかけるのである。

検温をするという看護行為は単に熱を測ったり、脈を計ったりするだけではないということは看護の学生でも解ることである。そこにコミュニケーションの機会があり、非言語的要素がコミュニケーションの中に含まれるのである。そこに反省的要素が含まれるとき、看護がartになると考える。ナイチンゲールは「観察せよ。試してみよ。広大な自然はあなた方の眼前に横たわっている。あなた自身の思考、あなたが望むもの、あなたが意図するもの、意識があなたに啓示するもの（それはあなた自身である。）これらは全てこのことが法に関して正しいか否かという質問に答えることになる。」<sup>22</sup>と述べ、さらに看護においては、観察することが目的のではなく、何を実践していくかを考えるために観察するのであると述べている。観察の中から得られた情報、これがいかに少なくともその中から考え、思考していく過程が看護である。

#### 4 看護教育における思考の訓練

さて、思考することの学習は、どのようにすれば学習者個人に啓発することができるのか。デューイは「学習（learning）とは思考することの学習である。即ち、教育は教育の知性的側面においては本質的に、反省的思考態度を培養すること、ならびに反省的思考態度が既に到達している立場を保持することに協力すると共に、粗雑な思考方法を変更して、可能な限り、常に厳密な思考方法に向けようとすることに関係がある。」<sup>23</sup>と述べている。つまり、デューイは反省的思考態度を持つように個人に働きかけること、更に一つ一つの問題を緻密に考えていくようにしていくことが思考の訓練であり、それが学習であると述べている。

さらに、デューイは「論理的に思考する人物は、いかなる時に論理的であるかといえ、それは彼が思考活動に注意しているときであり、彼が論証によって思考を進めたことを確認する努力をなしているときであり、また一つの結論に達した後、彼が結論を支持するた

めに、提示しえる実証によって結論を検証するときである。要するに“論理的”ということは、思考過程にあてはめて言われるとき、思考の過程が“反省的reflectively”に進められていることである。」<sup>24</sup>と述べている。

彼は思考能力の価値の根拠として、ジョン・スチュアート・ミルの『System of logic』の序文を引用して、推理を働かせることは人生の重要な仕事であると述べ、「現実の思考は（過程）processである。それは生起し、進行する。」<sup>25</sup>と述べている。例えば、私達は朝起きたとき、今しがた見た夢の意味は何だろう、今日一日はどんなであろうとか、絶えず、頭の中で考えている。夢には何の意味もないと考えるか、いや深層心理だと考えるかは個々によって違いがある。更に今日一日について思いを寄せる人はとりあえず、朝のテレビ番組の星占いでおおよその予測を立てようとするものもあれば、そんなことは気にも留めず、実際に起きる問題を一つづつ、考えながら解決していこうと考える者もあろう。つまり、現実には人は生活の過程の中で、大なり小なりの問題は絶えず生起し、その解決の為に絶えず思考しているのである。

デューイは「最善の思考作用が行われるのは容易な問題と困難な問題とが相互に適当に均衡を保っている時に限られる。容易な問題と熟知の問題が同一価値であるのは、あたかも奇異な問題と困難な問題とが同価値であるのと等しい。近いものと遠いものとの交流の必要は思考の本質から直接におきることである。」<sup>26</sup>と述べている。つまり、彼は自分の身近におきる簡単で容易に解決できる問題と、時折襲ってくる解決困難な問題とが適当に均衡を保っているときに、最も良い思考過程がおきると述べているのである。実際、解決困難な問題が多く個人を襲ってくる場合、恐らく、私達は何から解決して良いか分からなくなり、混乱状況に陥ってしまうであろう。

Thoughtには経験的思考(empirical thought)と科学的思考(scientific thought)の両者がある。経験的思考(empirical thought)におけるempiricalは観察や実験を基にした経験のことであり、experimentalと同義語である。Empiricalのemは内に向けることであるが、experienceのexは外に向ける事である。piricalとperienceの語源はperiri (=try)である。法則(law)とは自然界の普遍的な現象をいい、一般的に自然法則は経験の法則としての性格を持っているといわれている。デューイはexperienceを経験の概念として説明し、「目覚めている間、あらゆる“生活体”は“周囲の事物との相互作用”の内にある。」<sup>27</sup>と述べている。つまり、生活体としての人間は、環境から絶えず刺激を受け、その刺激と自己との相互作用で多くのことを経験し、学習していくのである。経験的思考(empirical thought)はある意味において有益である場合もあるが、誤った信念を生む傾向、新しい事態に善処する力を持たない、精神的不活発と独断主義を醸す傾向等があると考えられる。

他方、科学的思考(scientific thought)におけるscienceの語源はラテン語のscientiaからきており、人間の感情や信仰から区別された知的活動一般を意味する言葉である。経験的、個別的な知識から区別された理論的・体系的な知識を意味する言葉として“学”又は“学問”と同義語に用いられる。科学の対象はこの世界に存在するあらゆるものを対象とし、その方法も対象によって異なる。したがって、科学の具体的なあり方はその時代の社会、技術、思想のあり方と密接に関係がある。科学的に考えるということはある事象について分析を行うことであり、「科学的方法は単一の包括的な事実の発見により、個々の

事実の反復的な連結もしくは符合ということを除く。」<sup>26</sup>つまり、今、現在、起きている事象を結果として捉えれば、それが何故おきているのか、どのような原因でおきているのか、を一連の思考を通して、それらの因果関係を明確にすることにある。その思考過程は更に、その次に起きるであろう事を予測することが出来るようになるのである。デューイは「人が、自分がなそうとしていることを“知っている”とかあるいは、人がある結果を“意図する”ことができるかということ、彼がやがて生起するであろう事を、“これまで以上によく予見する”ことができる。」<sup>29</sup>と述べている。

つまり、健康問題で言えば、科学的に考えるということが問題を早く解決することにつながり、健康障害を予防することにもつながるのである。そうした活動の積み重ねが一つの普遍的な意味をもたらし、学問としての価値を見出すことになる。デューイ単なる活動は“経験”を構成しないと述べ、「活動が結果を受けることに連続していくとき、そして、活動によって引き起こされた変化がわれわれの内部に変化を引き起こすように跳ね返ってくる時、単なる活動の流れは意味を積み込まれることになる。」<sup>30</sup>と述べている。経験をし、分析する。そうした日常生活の中で考えることの訓練が学習することであり、そうした思考態度の育成が良質の看護を提供することにつながると筆者は考える。

## 結 語

デューイの『How we think』を手がかりに看護教育における思考訓練について検討した。Artとしての看護は非言語的要素に反省的思考の組み合わせであり、それは科学的思考である。人が思考している限り、現実の思考はprocessであり、不断の変化の中にある。デューイが述べたように、反省的思考とは日常生活に生起する問題解決そのものである。その意味で看護とは、人々の日常生活が健康であるように働きかけることであり、障害に伴って引き起こされる日常生活の変化に対応することである。問題解決をしていくための思考訓練の積み重ねを一つでも多く、看護教育の中に組み入れ、論理的な思考ができるようにしていく必要がある。他方、看護者も常に変化に対応しながら生活していく生活者であり、日常生活の中で学ぶ学習者であるといえよう。

## 参考・引用文献

- 1 松木光子著；看護における批判的思考能力の重要性, Quality Nursing, Vol. 2, No. 9, 文光堂, 1996年, pp6—7
- 2 Rosalinda Alfaro-Lefevre著, 江本愛子監訳；基本から学ぶ看護過程と看護診断 (Applying Nursing Process), 医学書院, 1996年, p 3
- 3 氏家幸子著；基礎看護学技術Ⅱ, 医学書院, 1994年
- 4 デューイ著, 植田清次訳；『How we Think (思考の方法)』, 春秋社, 1950年, p 80
- 5 下中弘編；哲学辞典, 平凡社, 1995年
- 6 キルパトリック (Kilpatrick, William Heard) 著, 市邨尚久訳；プロジェクト・メソッド (The Project Method), 明玄書房, 1968年, p 11
- 7 R. C. ボウルズ著, 今田寛訳；学習の心理学, 1979年
- 8 前掲書7) p 50
- 9 前掲書6)

- 10 杉野佳江編；基礎看護学，金原出版，1998年 p 586
- 11 ロザリンダ・アルファロ著，江本愛子他訳；基本から学ぶ看護過程と看護診断，医学書院，1996年 p P 3
- 12 前掲書4) p 79
- 13 前掲書 p 43
- 14 前掲書 p 97
- 15 前掲書 p 117
- 16 前掲書 p p 113-114
- 17 前掲書 p 130
- 18 前掲書 p 271
- 19 前掲書 p 172
- 21 前掲書 p 88
- 20 前掲書 p 99
- 22 Mary Poovey Edited, Florence Nightingale ; Cassandra / Suggestions for Thought, Pickering & Chatto Limited, 1991年, p 38
- 23 前掲書4) p 80
- 24 前掲書 p 78
- 25 前掲書 p 74
- 26 前掲書 p 291
- 27 John Dewey ; How We Think, (Revised Edition, ), D. C. Health and Company, 1933年, p 36  
デューイ著（杉浦美郎著，自己教育力が育つ授業—デューイ教育学の展開，日本教育研究センター，1988年） p 230
- 28 前掲書4) p 200
- 29 John Dewey ; Democracy and Education, southern Illinois university, 1985年, p 83
- 30 前掲書 p 146